「今、僕達にできること」

　　　　高野山中学校　三年　石堂　優也

　平成三十年七月、記録的豪雨が、西日本を中心に、北海道や中部地方を含む全国的に広い範囲を襲った。長時間の豪雨により、河川の氾濫や浸水、土砂災害が多発し、死者数が二百人を超える豪雨災害となった。これにより、多くの財産や家を失った方、大事な家族を亡くされた方がたくさんいた。

　そのことを知った僕は、一昨年の夏休みに、広島に帰省中だった父と、ボランティア活動に行った。現場に着くと、想像を絶する光景が目に入った。たくさんの土砂で建物が埋もれていて、たくさんの土嚢袋が、被災地の家の周りに、山積みに置かれていた。正直僕は、災害を甘く考え過ぎていた。

　ボランティア活動で、僕は、土砂を土嚢袋の中に入れる作業をした。大きな土嚢袋が、ほんのわずかな時間でいっぱいになった。土砂が入りきらなくなった土嚢袋の数が、当時の豪雨の恐ろしさを物語っていた。

　ボランティア活動は、数名で行った。その中には、被災した家族もいた。その家族の小学生の男の子は、とても明るく、災害によってピリピリしていた状況を和ませてくれた。その男の子の家も被災しているにも関わらず、

笑顔でボランテイア活動を行っていた姿に、僕は元気をもらった。同時に、自分自身が恥ずかしくなった。なぜなら、僕は、少しの間違いや失敗で、落ち込んだり、挫けたりしているからだ。僕は、その男の子にどれほど大切なことを学んだだろうか。

　僕は、今、何不自由なく安心して暮らしている。しかし、豪雨の恐ろしさを目の当たりにしたその男の子にとって、災害は心に大きな傷となって残っていたに違いない。なのに、男の子は、一生懸命ボランティア活動をしている・・・。

　僕は、このような災害が、二度と起こらないよう願っているが、自然災害は、完全に防ぐことはできない。だが、被害を減らすことは事前にできる。防風林や堤防がそうだ。また、人間一人が誰かを頼るのではなく、みんな一丸となって災害と向き合っていくことが必要である。災害と向き合っていくためには、災害に対する知識、災害が起きた場合の行動などを把握しなければならない。だから、災害を想定した訓練などに積極的に参加することが大切である。さらに、被災者の話などを聞くことによって、より災害に対する意識も高くなるはずだ。

今もなお、西日本豪雨によって破壊された家や土地がある。家に帰れず、仮設住宅で暮らしている方々が何人もいる。僕も含め、一刻でも早く復興を願う人達は、数えきれないほどいるだろう。だからこそ、この災害の恐ろしさを知って、災害に対する意識を高く持つことが大切である。

東日本大震災などの数々の災害が、日本を襲い、今もなお人々に恐怖を植えつけている。

「がんばろう日本」

この言葉は、被災者を勇気づけることを目的にしたキャッチフレーズだ。たとえ、どんな大災害が起きようと負けず、そして、数えきれない困難に挫けず、全国民で支え合いながら、災害に向き合おうという前向きな意味だと思う。

これからも、予想できない災害が日本を襲うことだろう。しかし、僕は、前向きな気持ちでボランティア活動などに取り組み、一刻も早く被災地を救っていきたい。災害により、立ち直れなくなってしまった方々の心を、一人でも多く助け、希望を取り戻せるように力を尽くしたい。

そう、あの被災した家族の男の子のように、災害に負けず、明るく僕に「勇気と希望」を与えてくれたように。

将来日本は、災害による被害を今よりも、無くせるかも知れない。僕達にできることは、その日本の「将来」の力になることだ。